

対馬歴史民俗資料館報

第 4 号
昭和56年 3 月

編集・発行

長崎県立対馬歴史民俗資料館
対馬厳原町今屋敷
郵便番号 817
電 (09205)-2-3687

印刷所

長崎市栄町 6-23
昭和堂印刷
電 (0958) 21-1234



銅造如來形坐像 統一新羅時代
(国指定重要文化財) 黒瀬観音堂

朝鮮仏の鑑賞 本館展示の 仏像其の他

津江篤郎

対馬には多くの古い仏像が散在し、保存され、そして深い信仰の中にある。それ等の仏像は京都や奈良で拝するような大きなものではないけれども、村人達の素朴な信仰の対象として長い間生きつづけてきたのである。

対馬の仏象の中には、対馬で制作された木彫の観音や女神像等の野趣に富んだ作品群がある。又、本土の中央仏師の制作になるものと、北九州文化圏彫刻と同類の作風を示すものと、いわゆる本土から島に來た仏像群がある。それから最も特徴ある存在である朝鮮仏像群がひっそりと散在している。

まったく対馬には朝鮮彫刻が集中的に存在しており、現在の調査の段階では百体以上を数えることが出来る。それ等は政治経済の中心地であ

った厳原町と、朝鮮に近い西海岸方面に多く收藏されている。そして制作年代は、朝鮮三国時代から統一新羅、高麗、李朝時代まで及び、対馬の人達が長い間、朝鮮仏へ親近感をもち、その美にうたれていたことを証明するかの如くである。中でも高麗仏が最も多いことは貴重なことであろう。材質は金銅(ブロンズ)、木像、石質像、陶像、木心塑造等があるが、数量的には断然金銅造のものが多く、最も大きいもので厳原町久根浜の大興寺の釈迦如来坐像で像高七八、一センチのものから、十数センチほどの小像(持念物)まで大小さまざまである。又、如来像、観音像、女神像、地藏菩薩等色々の種類の外に対馬には誕生仏が多いのが特徴であろう。

釈迦が生れた時「天上天下唯我独尊」といって手を上げて天地を指さされたという、独得のポーズのものである。四月八日の花まつりの日に甘茶をかけて礼拝する行事は今もなお残っている。稚拙愛すべき表現で、非常に現代的な自由な表現である。本土にある有名なものは長い裳をつけた形であるが、ここは短かい裳をつけ、又、右手を挙げるのに、左手を挙げた形のものまであって、

実に楽しい制作ぶりを感ずることが出来る。久根浜の大興寺、美津島町小船越梅林寺に收藏されているものは、代表作であろう。ともに十世紀から十一世紀の高麗時代の制作となっている。

対馬に遺る優れた代表的作品を紹介しよう。



銅像誕生仏 李朝時代
厳原町大平寺寄託

一七、九センチ)その存在価値は貴重なものである。

峰村木坂海神社に遺る銅造如来形立像は統一新羅時代(八世紀)の仏像で、大きな頭部にふっくらとした頬の肉付き、衣文線の美しさなど優れた造形感覚を示す、きわ立った作品といえる。像高三八、三センチ。(国指定重要文化財)

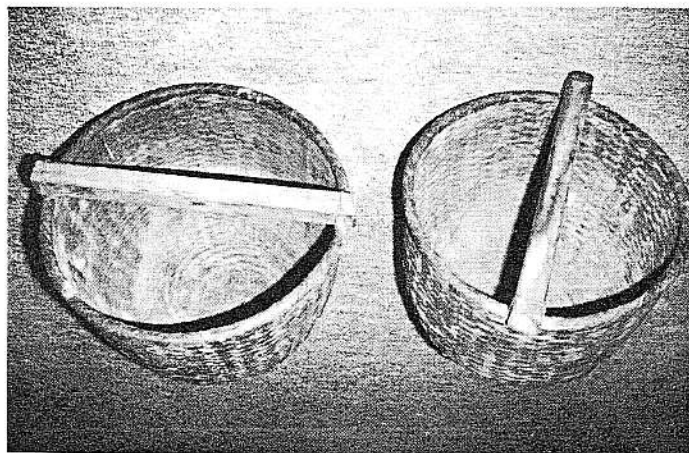
まず、極根法清寺の銅造菩薩立像をあげねばなるまい。現在、対馬にのこる朝鮮系彫刻のなかでは最も古いもので、三国時代百濟(七世紀)系のものであろう。頭部が体部に比べて大きく、その顔は純粹無垢の童顔である。この顔こそが後の写実的なものに比べて仏教美術の極所ではなからうか。小像ながらも、(像高

次に美津島町黒瀬観音堂の銅造如来形坐像をあげよう。統一新羅時代(九世紀)の作で、像高四六、七センチ。大きな特徴として、左肩から右脇にかけて、袈裟の線に沿って、上半身と下半身を別々に鑄造してある珍らしい形のものである。火災に遭って歪んだ箇所もあるが、その優れた面影には誰でもうたれるであろう。

う。(国指定重要文化財) 之等のすぐれた仏像は仏教美術を語る場合、無視できない存在であり、対馬の誇り得る作品群である。 当館展示の中では、大きいものは、峰村吉田普光寺銅造如来形坐像がある。像高五四・六センチ。この像は高麗末期ごろの制作と考えられている。とがりのある肉鬚や、平板になった鼻筋などの造形感覚は、ラマ彫刻の影響が認められる。像全体に青色絵具で補彩色したあとが残っている。 万松院銅造観音菩薩半迦像は宗家第一代の対馬を統一した重尚公の持念物であり、中国、宗代の彫刻の影響をうけたもので、後の白衣観音などとなっていく姿勢であり、注目すべき存在であろう。 他に大平寺、安神妙福寺、個人蔵寄託の銅造朝鮮仏(統一新羅、高麗、李朝)如来、菩薩、誕生仏、中国清朝時代の銅造菩薩形坐像、金工仏具等十数点の展示である。 これ等の彫刻をみると、扁平の形のものが多い。そして脊面に長い型ぬきの穴をもつものや、表面だけの工作で、脊面部は金々作ってないもの等もある。後世になるにつれて、横からみても整った形をとる写実的

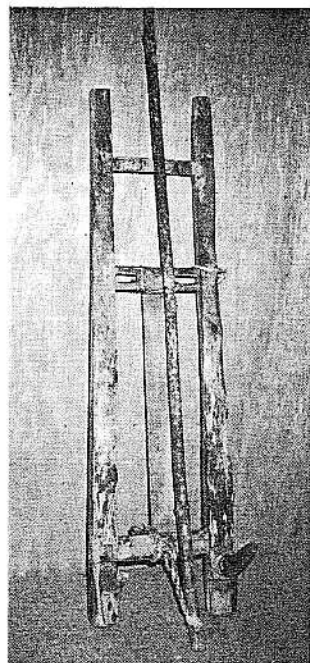
なものになって行くのである。又、
 仏像の中には火災に遭って、火中痕
 をのこし黒褐色を帯び、地肌が荒れ
 て、像容に鋭さを欠くものもある。
 普光寺の金鼓（梵音具）は鎌倉時
 代のもので、日本系鑄師による制作
 と判断される。四十二個の梵字を円
 相中に陽鑄して、大陸の影響がうか
 がわれるものである。

対馬に伝えられている仏像は、対
 馬が大陸文化の本土への飛石的経由
 地というだけでなく、直接関係しな
 ければならない特異な存在であった
 ことを物語る如くである。即ち、対
 馬は朝鮮半島と九州本土とに積極的
 交流を求めねばならない宿命があつ
 たのである。峰村佐賀の円通寺の須
 弥壇には、本尊が高麗仏、左側に本
 土の仏師作、右側に対馬作の素朴な
 仏像、これ等三体が不思議な調和の
 中に祭られている。それを礼拝し、
 鑑賞する時、これこそ対馬文化を象
 徴するものとして、泌々と思うので
 ある。



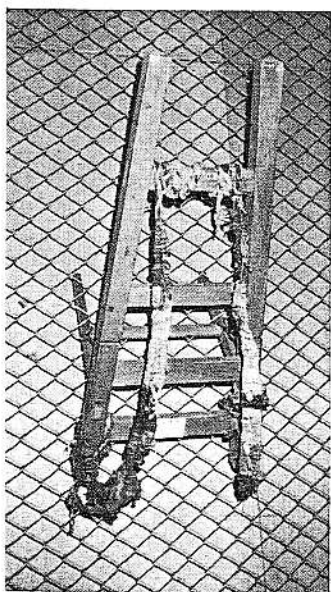
水運び甕 竹で編んだ甕に和紙を貼り、柿渋を塗ったもので、水が
 漏れないようにできている。火事の際水運びに使用した。

岡部虎男氏寄贈



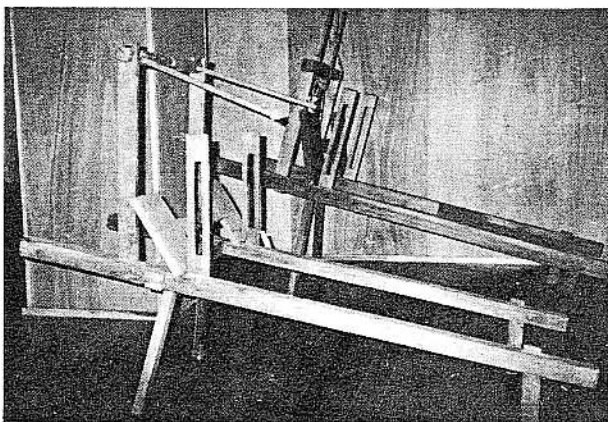
負子（おいこ）

木の肢を利用したもので、古い形式のものである。
 岡部虎男氏寄贈



負子（おいこ） 背負具の発達した形式で、俗にシケーと
 も称した。朝鮮の子ゲーに形も似ている。

古藤 満氏寄贈

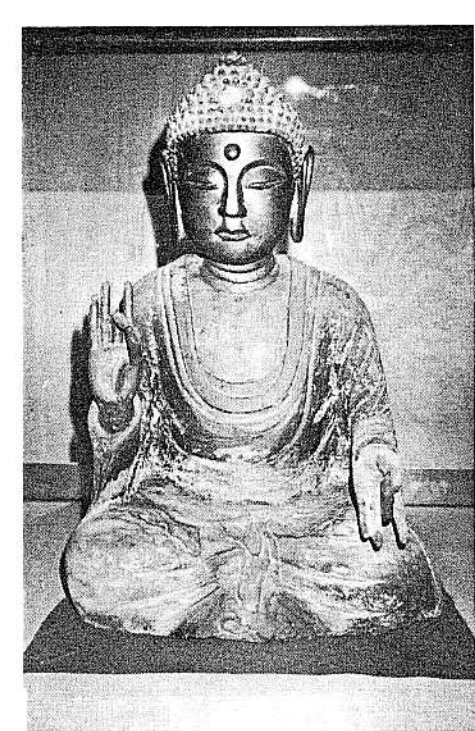


地機（しばた） 高機が普及してからも、なお遺っていたもの
 である。手前は佐護の原清美氏寄贈。
 向側は雑知の大浦氏。

古文書を読む

白井 傳

昭和五十二年の秋紅葉の頃より、道友十餘名ばかり相寄つて、毎週一回夜、町の公民館に集り、古文書を読むことをずっと続けて来た。「對馬古文書研究会」などという会名でもうかれこれ三年四ヶ月餘りにもなるであろうか。一字一句呻吟しつつ漸く読み進んで来た。講本は主として、元祿、享保頃の郷国の先覺の諸著で、雨森東五郎(芳洲)の「治要管見」、三山雷夏の「御国家盛衰論」、陶山存(訥庵)の「旅人吟味批判口上覺」、「告新録」、同じく「水利御下知之覺書」、同じく「水屋荒瀬境川一件内談記録」、其他「被仰出書控」「竹取翁物語」「日用文章」「覺書寫」等十餘冊ばかりで、現在は、岩崎愛山の「老人談」をこ半歳ばかり読み進み、これも終り近くなったので、次は陶山庄右衛門の「對韓雜記」を予定したりしている。



銅造如來形坐像 高麗時代
峰町吉田普光寺寄託
(長崎県指定文化財)

この逝く年、迎うる年の寒冬の夜々を読んで来た愛山の「老人談」はその巻の末尾に、「愛山」の自署にて、

「天保三壬辰年九月廿五日に始めて、同十一月七日に終る。病苦中に寝ながら書綴る下書のままなれば、文句正しからず、落字書損あり。墨附紙百二十六枚。」

と書いている。愛山五十歳に近き頃、病床に堪え難き痰癆を忍びつつの著作の様である。その序文の終りには

「あはれむかしの戀しさにわすれもやらぬおいびとのことのはのいろを、かくなもじもて拾ひ集め、朽ち残る世のかたみとも笑艸の種ぞまく。」

とも記しているが、全巻洵に達意の文言にて、測々として胸奥に銘する書冊であった。

その「六十七葉」あたりに、次の様な、わが對馬の先覺、賀嶋兵助(恕軒)と、陶山存の二人の朋友親交の條と、清冽の士風が、今のうつつに偲ばれ、日頃の懶惰を省鑿しつつ、感慨一入に覚ゆるのであった。

「賀嶋(兵助成白)先生は、御国の賢人にて、人のよく知る事なれども、其後、先生故ありて伊奈に配流せらる。先生配所に赴かる時、家の鎗掛を見られしに、其ころ鎗を修補につかわし置かれ、一本不足して鎗掛の見苦しかり、されば士として家を離るるに鎗掛の透きたるは、武備の足らざる所にして、恥ずべき事なりとて、常に交深かりける陶山先生に、申遣はされ、鎗を一本所望ありしに、さもあるべきなり、いとやすしとて、陶山より鎗をつかはされしと。

先生の配所に塾居ありて、昼は麥飯を一食し、夜は夜具をも着ず、寒中にこごえられ極難の体なるよし、府中に聞へければ、陶山先生是を憐み、ひそかに夜具を送りて、懇に音信あり。其時先生の返答に、予罪ありてかく罰を蒙り、懲めのためにて、配所に遣はされし身なる、いかにか、飽までに食ひ、温きに衣して、豈君の禮儀を失はんや。懇情かたじけなしといへども、うけ用ひがたしとて、夜具を返されて患難に身を懲し、塾居に慎みて、月日を過されしが、久しからず卒去なり。先生配所の跡に、大森雷首が石碑を立られし其句は、

たつ鳥のあとの清さや麥畑」と記されている。

郷島父祖先人の士魂風懷の清しく雄々しかるを、今に泌々と想うこの頃である。

※

しもこほるよひをしよめばふるぶみのりんれつのおもひむねにしむがに